

音源の比較試聴(12)
—マーラー交響曲 4 番—

1. 始めに

前報(11)に引き続き、各種音源の再生経路に関するアースアキュライザーを含む種々の対策の効果の確認のため、各種音源の比較試聴を実施します。

2. 音源の比較試聴の試聴方法と音源

各種音源の再生経路に関するアースアキュライザーを含む種々の再構成はアースアキュライザーの活用(6)で述べたとおりで、さらに対策を追加しています。今回もそれらの対策の効果をも、音源を替えて総合的に確認していきます。

音源は、下記の音源のグスタフ・マーラーの交響曲 4 番を聴いていきます。

アナログ盤

PIONEER H10001V

ハロルド・ファーベルマン指揮ロンドン交響楽団

CD

ドイツグラモフォン UCCG4476

クラウディオ・アバド指揮ウィーンフィル

ドイツグラモフォン 474-991-2

ピエール・ブーレーズ指揮クリーブランドオーケストラ

STAGE+

レナード・バーンスタイン指揮ウィーンフィル

ベルリフィルデジタルコンサートホール

ロビン・ティチャーティ指揮ベルリンフィル

セミヨン・ビシュコフ指揮ベルリンフィル

CONCERTGEBOUWORKEST

イヴァン・フィッシャー指揮アムステルダムコンセルトヘボウ

マリス・ヤンソンス指揮アムステルダムコンセルトヘボウ

3. 音源の比較試聴の試聴結果

アナログ盤のファーベルマン指揮ロンドン交響楽団は、1979年のデジタル録音です。デジタル録音のためか、すっきりとした爽やかな音質で、低音は量感豊かな迫力がありますが、初期のデジタル録音のせいか、弦や木管は若干湿度感が不足しています。

CDのアバド指揮ウィーンフィルは、1977年のウィーン楽友会館での録音です。ア

ナログマスターからの CD へのリマスターであり、ウィーンフィルの演奏とあって、EMT981 の再生特性にも助けられ、色彩感あふれる表現が展開されます。

CD のブレーズ指揮クリーブランドオーケストラは、1998 年録音の SACD/CD ハイブリッド版です。録音年代が新しいだけあって解像度もよく、切れ味鋭い音で迫力ある表現が展開されます。

STAGE+のバーンスタイン指揮ウィーンフィルは、1972 年の収録です。収録年代は古いのですが、予想外にフレッシュで、ウィーンフィルの音が再現されています。

ベルリフィルデジタルコンサートホールのティチアーティ指揮ベルリンフィルは 2023 年の収録、ビシュコフ指揮ベルリンフィルは 2021 年の収録です。ともに最新の収録で、指揮は違いますが、まぎれもなくベルリンフィルの演奏で、音の細部まで表現が行き届いています。

CONCERTGEBOUWORKEST のフィッシャー指揮アムステルダムコンセルトヘボウは 2010 年の収録、マリス・ヤンソンス指揮アムステルダムコンセルトヘボウは 2014 年の収録です。指揮は違いますが、まぎれもなくアムステルダムコンセルトヘボウの演奏であり、以前と比べて解像度も上って滑らかになり、各パートの楽器の質感も向上しています。

4. まとめ

いずれをとっても、アースアクライザーの投入とそれに伴うアースラインの再構成、さらには AV ドーナッツなどの結果、すべて効果がそれなりに現れ、演奏の違いも把握でき、格落ちするような音源のフォーマットや再生経路はなくなったことが確認できました。

以上